

小塚八幡神社前古墓発掘調査報告書

1985

財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	1
III 遺構と遺物	5
IV まとめ	11

例 言

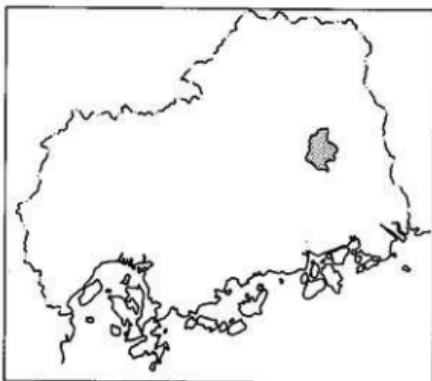
1. 本書は、昭和59年10月に実施した県道三原一東城線道路改良事業に係る小塙八幡神社前古墓（広島県甲奴郡上下町所在）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島県上下土木事務所から委託を受けて、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 遺構の実測・写真撮影は妹尾周三・梅本健治が、遺物の実測・写真撮影及び実測図のトレースは梅本が行った。
4. 本書は、梅本が執筆・編集した。
5. 図版と挿図の遺物番号は同一である。ただし、図版の遺物番号は次のように略号化してある。
(例) 8-1 ……第8図1を示す
6. 本書に用いた方位はすべて磁北である。
7. 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（上下）を使用した。

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)	2
第2図 周辺地形図 (1:2,000)	4
第3図 地形測量図 (1:200)	5
第4図 積石部実測図 (1:60)	6
第5図 土層断面図 (1:80)	7
第6図 土壌実測図 (1:40)	8
第7図 基底面地形測量図 (1:200)	8
第8図 出土土器実測図 (1:3)	9
第9図 出土砥石・土製品実測図 (1:2)	9
第10図 出土古錢拓影 (2:3)	10

図版目次

図版1 a 速 景 (東より)	図版3 a 土 壤 (北東より)
b 同 上 (南より)	b 東西断面 (南より)
図版2 a 積 石 部 (南より)	図版4 a 古墓基底面 (南より)
b 同 上 (北より)	b 同 上 (北より)
図版5 出土遺物	



上下町位置図 (アミ目)

I はじめに

本発掘調査は、県道三原一東城線道路改良事業に係るものである。県道三原一東城線は管内の重要路線であるが、近年の交通量の増加、車両の大型化等により交通に支障をきたした。そこで、交通事故防止を図り、地域経済の発展に寄与するため、この道路改良事業が行われることになった。

昭和58年7月、広島県上下土木事務所(以下「上下土木」という。)から広島県教育委員会(以下「県教委」という。)に、県道三原一東城線道路改良事業予定地内における埋蔵文化財の有無及び取扱いについて照会があった。県教委ではこれをうけて現地踏査を行い、予定地内に小塚八幡神社前古墓が存在する旨、上下土木に回答した。その後、県教委はこの取扱いについて上下土木と協議したが、遺跡周辺のは場整備事業計画との関係で路線の変更ができないため、古墓の現状保存は困難であるとの結論に達し、この古墓について事前に発掘調査が必要である旨を上下土木に通知した。昭和58年10月、上下土木は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター(以下「センター」という。)に発掘調査を依頼した。昭和59年7月センターは上下土木との間に委託契約を締結し、同年10月の約1か月間調査を実施した。調査面積は約76m²である。本報告書は、この発掘調査の結果をまとめたものであり、当地域研究の新たな資料として活用されれば幸いである。

なお、調査にあたっては上下町教育委員会、広島県上下土木事務所及び地元の方々には多大なる協力を得た。記して謝意を表したい。

II 位置と環境

広島県の東部に位置する甲斐郡上下町は、標高400~500mの起伏の緩かな吉備高原面に位置する。上下町は、竜王山(標高768m)に源を発して西流する上下川(江の川水系)流域と、神石高原に源を発して南流する矢多田川(芦田川水系)流域とに大きく二分される。北半の上下川を中心とした地域は、各所に狭小な谷底平野を形成し流れも緩かなのに対して、南半部では、急激な浸蝕力をもつて流れる矢多田川によって陥しく深い谷が多くつくられている。また、各所にモナドノックと呼ばれる残丘がみられ、丘陵の高低差が著しい。¹¹⁾ 小塚八幡神社前古墓は、この上下町北東部の竜王山山塊の南西側丘陵の一角にある。古墓が立地する丘陵は東西両側に狭い谷がありこんだ舌状の丘陵で、周辺は現在では水田地帯となっている。

上下町内では現在縄文時代以降の遺跡200箇所以上が確認されている。以下、時代ごとにその概要を述べて行きたい。

縄文時代 町南部の扇原遺跡¹²⁾で前~後期の縄文土器及び石斧・石鎌・剝片が採集されている。遺物は、北流する矢多田川の谷頭を中心とした200m×500mの範囲で出土している。また、行

年遺跡でも早期及び中期の縄文土器・石器などが出土している。

弥生時代 下郷桑原遺跡・行年遺跡・中居遺跡で中期後半の、道城遺跡では後期後半の住居跡が各々検出されている。また、浄円寺～上高地区では中期後半の弥生土器及び分銅形土製品が出土している。

古墳時代 遺跡では古墳が主体を占め、昭和56年3月の時点では総数119基を数え、その後の踏査によって、現在、140余基の古墳が確認されている。その中で、前方後円墳は南山第1号古墳（全長24m）、小塚中山第5号古墳（全長28m）、古城跡第1・2号古墳のみで、他はすべて円墳である。円墳は、径10m前後のものが大半を占め、最大のものでも小塚中山第2号古墳が径22mであるにすぎない。また、住居跡は行年遺跡・下郷桑原遺跡で検出されている。

古代 遺構としては、下郷桑原遺跡において瓦・須恵器（墨書き土器を含む）・綠釉陶器などと共に、8世紀～9世紀初頭に属する掘立柱建物跡が検出されている。そのほか、矢野字根などで



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

は7～8世紀の須恵器窯跡が確認されている。

中近世 山城跡・古墓などがある。山城跡としては、県史跡有福城跡をはじめとして翁山城跡・國留城跡などがある。上下町中心街の北方2kmの位置にある有福城は、鎌倉時代に有福莊地頭職土肥実平が居城したのち、南北朝時代には南朝方の竹内兼幸が、さらに室町時代には有福氏が代々居城したと伝える。城跡は標高531m、比高150mの丘陵上に立地し、南北60m×東西20mの規模をもつ本丸と、この本丸から東北方向及び西北方向にのびる尾根に各3段の小郭群を配し、本丸の南にのびる尾根の先端には出丸とみられる小郭2段が存在する。西斜面には東西方向にのびる堅堀1条がみられる。西麓には「土居」の地名が残る。翁山城跡は上下町の町並みを西北方向に見おろす標高538m、比高160mの翁山山頂に立地し、鎌倉御家人長谷部信連の子孫が代々居城した。東西74m×南北16mの規模をもつ本丸と、この本丸の東西に各1段の小郭を配し、東側ではこの小郭の下位に石垣による鑓形の郭を設けている。上下町の中心から西南方向約1kmの位置にある国留城跡は、比高10mの低丘陵上に立地し、土塁で囲まれた土居型式の城跡である。城主としては、室町時代後半の山名氏配下渡辺元家の名が知られている。

古墓は、有福城の西側対面の丘陵先端に立地する広末古墓、階見のそね古墓などが知られる。いずれも墳丘をもつもので、前者は盛土を行なった平面形が隅丸方形を呈するもの、後者は平面形が円形を呈し石積みによって墳丘をつくっている。また、国留の浄円寺本堂裏山では亀山焼系の骨蔵器が出土している。この骨蔵器は口径31.8cm、器高42.4cmの壺で、胴部外面には格子目叩きが顕著に認められる。丸底の底部には径3cmほどの円孔がうがたれている。壺の内部からは、木質が付着した鉄釘とともに人骨片(火葬骨)・齒が検出されている。なお、小塚八幡神社前古墓背後の丘陵上では同じく亀山焼系の平底の壺2個体分の破片が土師質土器(小皿など)とともに表面採集されている。いずれも器表は灰黒色を呈し、1個体は復元口径26cm、底径22cm余で胴部外面には格子目叩きを施し、くの字状に屈曲する口縁をもつ。もう1個体は底径16.8cmの壺で、胴部外面には斜位の平行叩きを行なっている。

次に、上下町内では中～近世の宝篋印塔・五輪塔・無縫塔など石造物の存在が多く知られている。これらの石造物についてはいずれもその下部構造の有無及びその状況について判明しておらず、造立年代についても一部を除いて不明である。また、特に五輪塔については墓地移転などに伴って1箇所に寄せあつめられて、原位置を失っているものが多い。しかし、小塚上組共同墓地内の宝篋印塔、上下下野町の野田家裏の宝篋印塔、国留時鳥の宝篋印塔などのように径4～5m、高さ1.5～2m程度の塚の上に立てられている例もみられる。特に後2者については、塚のまわりに小型五輪塔が数基ないし約20基立てられており、これらが塚上の宝篋印塔となんらかの関連をもつであろうことは十分考えられる。

(註)

(1) 藤岡謙二郎『過疎化の進む内陸盆地と河谷地域』 昭和47(1972)年

(2) 服部宣昭・藤田雅己「上下町における縄文、弥生遺跡調査報告その1」『上下高等学校研究紀要』1 昭和

42 (1967) 年

服部宣昭・妹尾周三「甲奴郡上下町桑原から発見された縄文時代の遺物について」『芸備』第6集 芸備友の会 昭和53 (1978) 年

服部宣昭・妹尾周三「上下町における縄文・弥生時代の遺物について」『甲奴郡文化財研究』第5巻 甲奴郡文化財研究会 昭和54 (1979) 年

(3) 勧廣島県埋蔵文化財調査センター・上下町教育委員会「行年遺跡見学会資料」 昭和59 (1984) 年

(4) 勧廣島県埋蔵文化財調査センター『下郷桑原遺跡』 昭和59 (1984) 年

(5) 昭和58 (1983) 年度の広島県教育委員会の試掘調査による。

(6) 服部宣昭「甲奴郡における弥生時代の遺跡と遺物について」『甲奴郡文化財研究』第2巻 甲奴郡文化財研究会 昭和47 (1972) 年

服部宣昭・妹尾周三「上下町における縄文・弥生時代の遺物について」『甲奴郡文化財研究』第5巻 甲奴郡文化財研究会 昭和54 (1979) 年

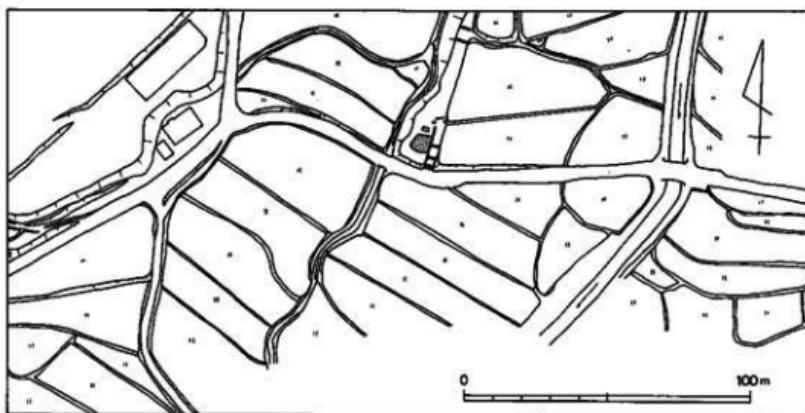
(7) 熊治益生「甲奴郡上下町出土の分鋼形土製品」「ひろしまの遺跡」第7号 勧廣島県埋蔵文化財調査センター 昭和56 (1981) 年

(8) 上下町教育委員会「上下町の古墳分布」 昭和56 (1981) 年

(9) 藩坂光彦「南山1号古墳」『芸備』第10集 芸備友の会 昭和55 (1980) 年

(10) 服部宣昭「上下町及び甲奴町出土の二、三の土器の紹介」『甲奴郡文化財研究』第4巻 甲奴郡文化財研究会 昭和51 (1976) 年

(11) 上下町教育委員会「上下町の石造遺品」 昭和54 (1979) 年

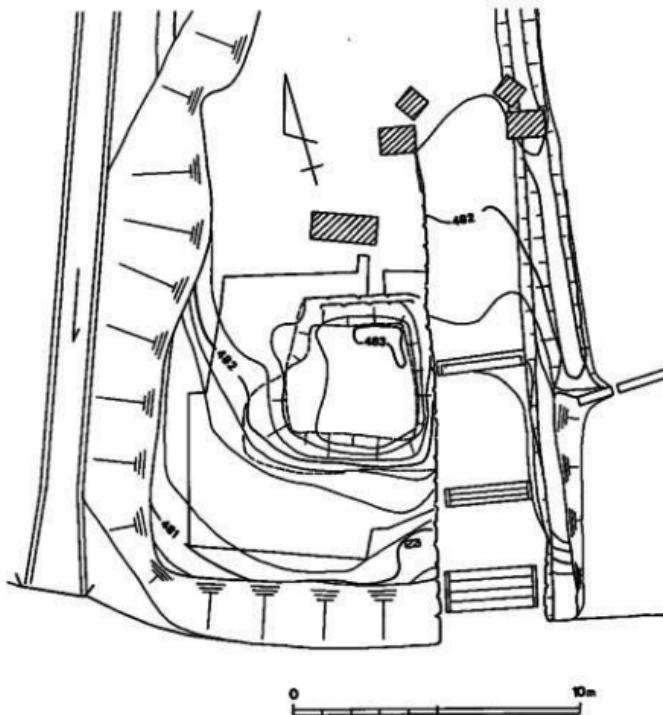


第2図 周辺地形図 (1 : 2,000) アミ目は古墓

III 遺構と遺物

小塚八幡神社前古墓は、広島県甲奴郡上下町小塚字天神耕地541-1に所在する古墓(積石塚)である。

立地(第2図、図版1a・1b) 本古墓は上下町内北東部、上下川(江の川水系馬洗川支流)の上流域に盆地状にひろがる水田地帯のほぼ中央に位置する(この水田地帯は東西1.75km、南北0.4kmの規模をもち、その標高は480~520mをはかる)。古墓は、竜王山山頂(標高768m)から南々西方向に派生する尾根端部に鎮座する小塚八幡神社の参道入口の西側に立地する。参道及び参道東側の水田面は周囲の水田面より一段高くなっている、参道周辺の旧状は東西両側に谷がありこんだ南北に細長い丘陵であったと考えられる。即ち、古墓はこの丘陵の端部に位置していることになる。なお、古墓墳頂までの西側水田面からの比高は約4~5mである。

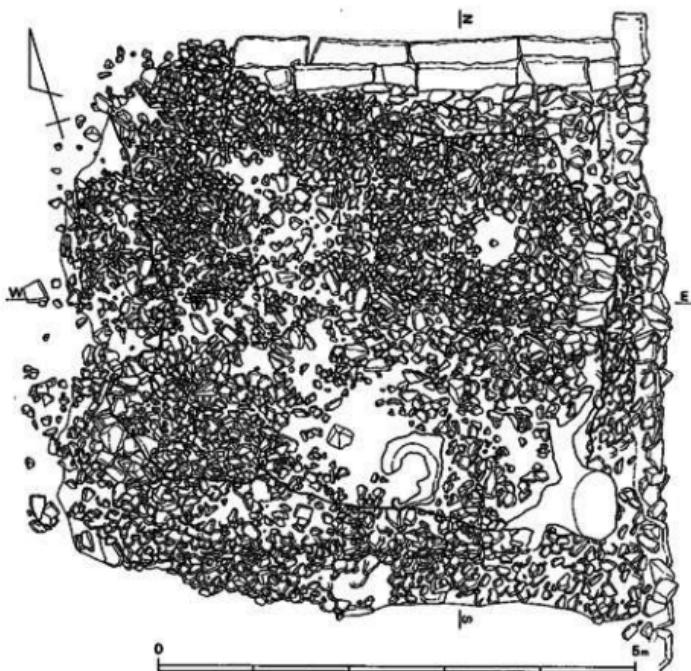


第3図 地形測量図 (1:200)

現状と規模 古墓は、参道入口の西側に張り出した南北25m×東西10mの空闊地の中央にあり、その東辺及び北辺墳裾は石垣の構築時に若干の削平をうけている。古墓の北側は平坦地に一面芝が張られ、その中央には“御興台”が据えられている。古墓西側は明治末期まで使われたと伝えられる旧参道（この旧参道の造成土により古墓の西辺墳裾は50cm程度埋没している）であり、1m弱の段差を経て古墓西南側から南側にかけて低くなっている。

現状規模は、南北6.0m×東西6.1mで、その平面形はほぼ正方形を呈する。高さは、北辺墳裾から0.8m、南辺墳裾から1.4mである。墳頂部は東辺側が高く、最高所の標高約483mであるが、墳頂部西半は後世の擾乱による積石の一定程度の流失が認められる。

古墓の構造・構築状況（第5図、図版3b） 本古墓は、上記のように東西両側に谷がありこんだ南北に細長い丘陵端部に立地し、その頂部に構築されている。構築順序は、先ず丘陵端部を高さ1m余りカットし、次いで丘陵頂部を一定程度削平して古墓基底面としてその上に厚さ10~30cmほど暗茶褐色土を盛り、さらに、その上に混暗褐色土躰を厚さ18~50cm程度盛って、方形台状に整形して古墓の構築を終了している。古墓基底面は概して地山面（暗黄灰色粘質土

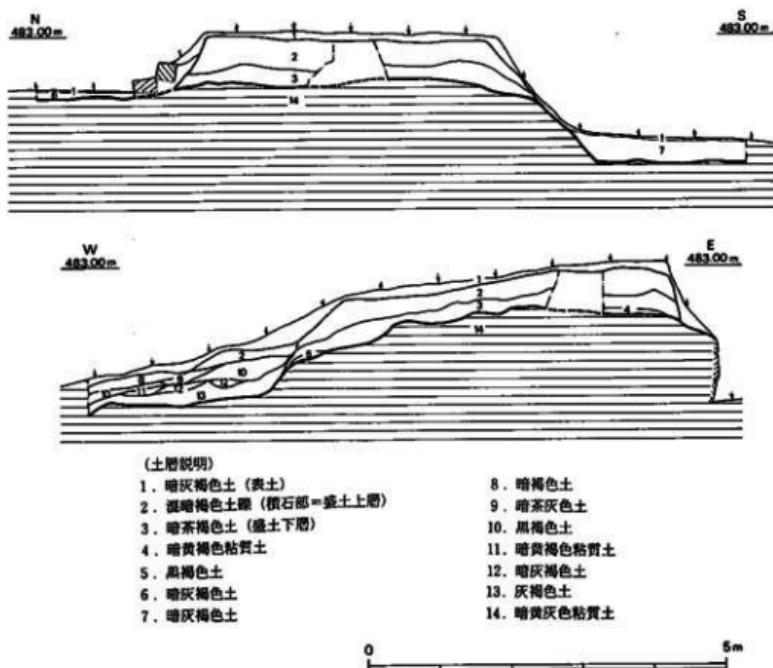


第4図 積石部実測図（1：60）

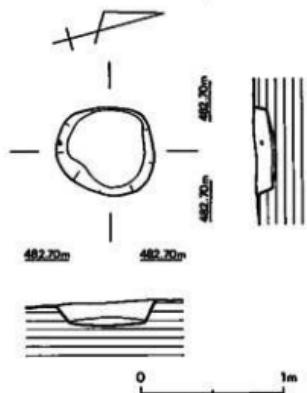
層上面)を削平・露呈しているが、斜面には一部旧表土(暗茶灰色土)が残存している。古墓の盛土部分そのものの高さは80cm程度にすぎないが、前述のように南辺は地山を大きくカットして、そのカット面に混暗褐色土疊をうすく盛っているので、南辺墳裾からの高さは他の墳裾からのそれに比べてほぼ2倍の高さに匹敵する。即ち、本古墓を前方(南方)から見ると、実際以上に高い古墓に見える。

土壤(第6図、図版3a) 古墓基底面の東北部に偏した位置で、本古墓の主体部かと推定される土壤を検出した。この土壤は、古墓北辺から約1.5m南、東辺から約1.3m西の位置で検出したもので、南北68cm×東西61cm、深さ9~15cmの南北にやや長いほぼ円形の浅い土壤である。土壤内からは、南側の壁面上で土師質土器片1点が出土したのみで、人骨・灰・炭・焼土などは出土しなかった。

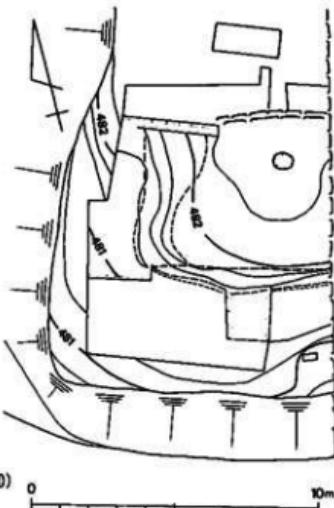
遺物 積石部上面、積石部内、暗茶褐色土層中、基底面上などから土器(磁器・陶器・土師質土器)・砥石・土製品・古錢などが出土している。



第5図 土層断面図 (1:80)



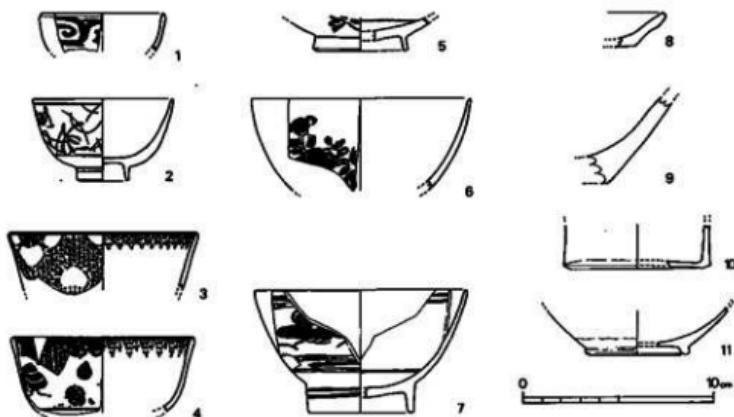
第6図 土壌実測図 (1:40)



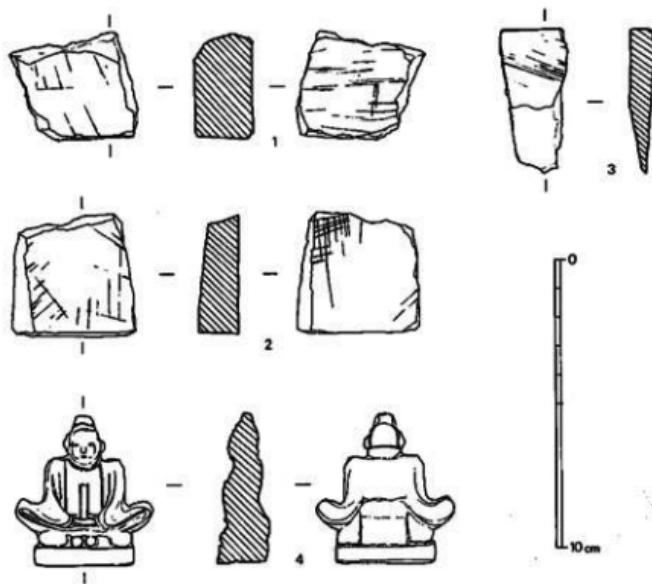
第7図 基底面地形測量図 (1:200)

1. 土器 (第8図、図版5) 磁器 (1~7)・陶器 (9~11)・土師質土器 (8) がある。磁器は、いずれも白色の素地に染付を施した碗である。1~4は表土・旧参道造成土などから出土したもので、直接本古墓に伴う遺物ではない。1は復元口径6.6cmで、外面に淡灰青色の吳須で雷文様の文様を描いている。2はほぼ完形の小型碗で、口径7.4cm、高台径2.8cm、器高4.3cm、高台高0.7cmである。体部外面に濃紺色・淡紺色の吳須を用いて草花文と4条の横線を描いている。高台疊付のみ露胎で、そのほかは施釉されている。3は復元口径10cmで、外面全体及び内面口縁部に濃紺色の染付を行なっている。4は復元口径9.6cmで、外面全体と内面口縁部に濃紺色の染付を行なっている。3・4は類似した窓匠の文様で、吳須の色調も同一である。いずれも、明治年間の短期間に焼かれた小谷焼と考えられる。5~7はいずれも積石部内・暗茶褐色土層中から出土したもので、直接本古墓に伴うと考えられる伊万里系の磁器である。5は、高台片で復元高台径5cm、高台高0.7cmである。体部外面に淡青色・緑色の草花文の染付を行なっている。高台疊付は施釉せず、露胎である。6は復元口径11.6cmで、外面に淡青色の吳須を用いて草花文を描いている。7は復元口径11.2cm、復元高台径5.5cm、器高6.4cm、高台高1.5cmで、体部外面に淡紺色・紺色の吳須で草花文を描く。高台はほぼ垂直に立ちあがる高い高台で、疊付は無釉である。

8は基底面上から出土した土師質土器(小皿)である。比較的厚手のもので焼成は良好で全體に硬質である。内外面ともに横ナデ調整を施しており、底部は回転糸切り離し手法による。



第8図 出土土器実測図 (1 : 3)



第9図 出土砥石・土製品実測図 (1 : 2)

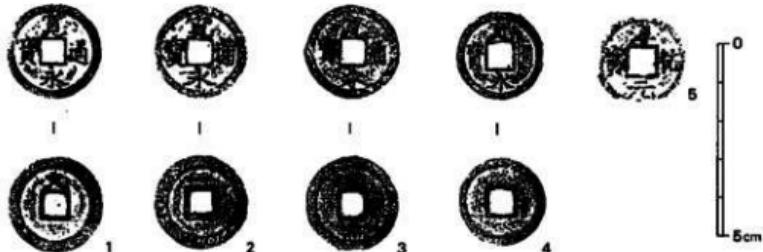
9～11は陶器で、いずれも表土・造成土中から出土した。9は淡灰褐色～淡褐色の素地に褐色釉を施したもので、体部外面の下端にわずかに露胎部分がみられる。底部は回転ヘラ切り離し手法による。10は復元底径7.7cmの瓶で、黄白色の素地に体部外面のみ透明釉をうすく施している。11は低い削り出し高台をもち、復元高台径5.5cm、高台高0.4cmである。褐色の素地にごくうすい灰色釉を内面全体と体部外面に施している。体部外面下端及び高台は無釉である。内底面に現状で2箇所（元来3箇所か）釉が剥がれている箇所がみられる。

2. 砧石・土製品（第9図、図版5） 1～3は砧石、4は土製品（土人形）である。

1は表裏面及び下端面が使用面で、擦痕が顯著である。石材は不明だが、褐色～暗褐色を呈する。大きさは4.4×3.8cm、厚さ2.1cmで、左右及び上半を折損している。2は表裏面及び下端面が使用面で、擦痕が顯著である。石材は不明で、暗灰色を呈する。大きさは4.2×4.2cm、厚さ1.4cmで、左右及び上半を折損している。3は表面及び上端面を使用面とし、擦痕が顯著である。石材は不明で、暗灰色を呈する。大きさは5×2.3cm、厚さ0.9cmで、左右及び下半、裏面を折損している。1は造成土中、2は積石部上面、3は積石部内の出土である。

4は積石部内から出土の素焼きの土人形で、天神像である。表裏別々の型を用いて作られ、側面に縦方向の接合痕が認められる。高さ5.2cm、幅4.8cm、厚さ1.85cm。色調は淡黄褐色を呈する。

3. 古銭（第10図、図版5） 計7枚の古銭が出土した。内訳は寛永通宝6（銅銭4・鉄銭2）、淳祐元宝1である。寛永通宝6枚のうち銅銭はすべて拓影・写真を呈示したが、鉄銭は写真のみを呈示した（図版5のa、b）。1は径2.45cm、穿の一辺0.6cmで、背上に「文」銘がみられる。2は径2.3cm、穿の一辺0.6cmで、背銘はみられない。背面の郭が他のそれに比してやや広郭であり、また背面下半の中央に小孔がみられる。3は径2.4cm、穿の一辺0.6cm、背銘はみられない。4は径2.3cm、穿の一辺0.7cmで、背面の郭の右上に「星」がみられる。以上、1～4は寛永通宝（銅銭）である。5は南宋・淳祐元（1241）年初鋤の淳祐元宝である。縁辺の破損がやや顯著だが、径はほぼ2.4cm、穿の一辺0.7cmである。



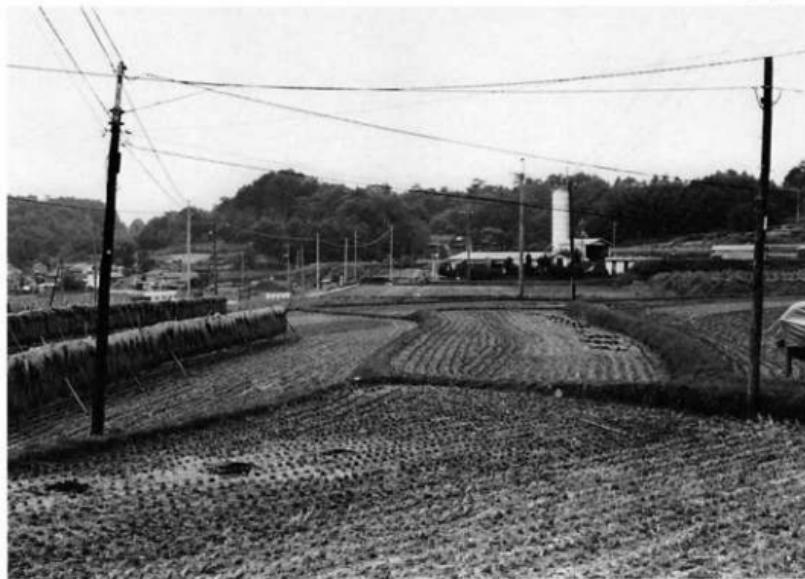
第10図 出土古銭拓影 (2 : 3)

IV ま　と　め

小塚八幡神社前古墓は、上下川上流の右岸にひらけた盆地状の水田地帯中央に派生した南北に細長い舌状丘陵の南端に位置する。

古墓は、丘陵端部の頂部に削平を加えて基底面とし、その上に暗茶褐色土及び混暗褐色土礫を80cmほど盛土し、一辺約6mの方形台状に構築している。また、丘陵端部のみ1m弱のカットを行っているのは、古墓を実際以上に大きくみせるという古墓南方からの視覚面での効果を考えたと思われる。古墓北東部の基底面上で検出した土壌は、平面規模61×68cm、深さ9~15cmのごく浅い円形土壌で、本古墓の埋葬施設の可能性がある。古墓に伴う遺物としては、宋銭・寛永通宝・磁器・土師質土器・土人形・砥石があり、宋銭・土師質土器を除いて江戸時代のものである。ただ、土師質土器については江戸時代の可能性もあるが確言できない。

「積石塚」は大きく①大形の角礫等を用いて周縁に基壇を築き、その内部に小礫・混土礫を積みあげるものと、②基壇をもたず、小礫・混土礫のみを積みあげるものとに分けられる。①については、土壌・骨蔵器など埋葬施設をもつものや、礫間・基壇上などに火葬骨などの人骨片が検出されるものがあることから、その埋葬状況については比較的様相が明らかになっている。また、礫間などから出土する若干量の陶器・土師質土器などの土器類あるいは古銭(宋銭・明銭など)などから、ごく大まかながら室町時代を中心とした年代が与えられている。それに対して②の形態の積石塚については、埋葬状況・所属年代などについて殆んど判明していない。小塚八幡神社前古墓はこの②の形態の積石塚であり、埋葬施設の可能性がある土壌も存在するが、人骨片等の出土もなくその埋葬状況については明確でない。出土遺物は一部に中世的な様相を示すものもみられるが、大半は江戸時代のものである。以上のことから、本古墓を江戸時代を中心とした時期の積石塚としてとらえておきたい。



a. 遠 景 (東より)



b. 同 上 (南より)



a. 積石部(南より)



b. 同上(北より)



a. 土 壁 (北東より)



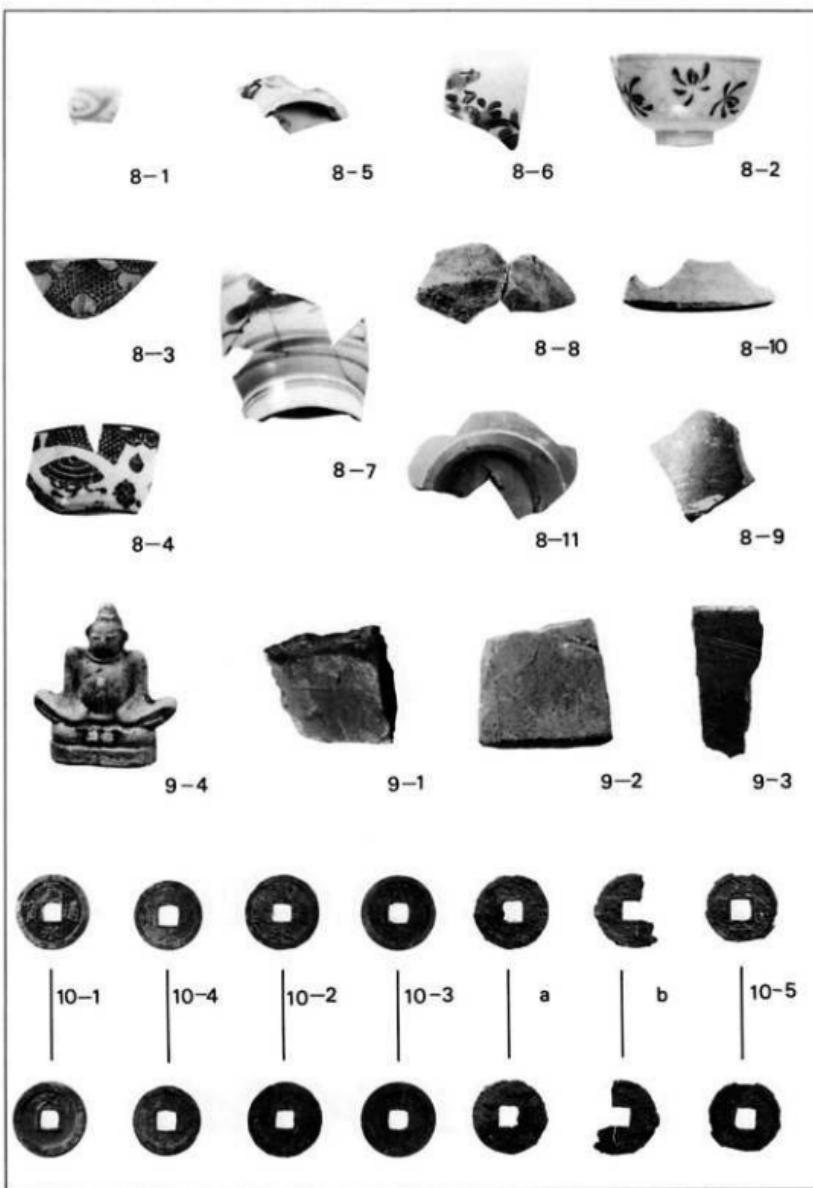
b. 東西断面 (南より)



a. 古墓基底面（南より）



b. 同 上（北より）



出土遺物 (a・bは鉄錢)

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第43集

小塚八幡神社前古墳発掘調査報告書

発行日

昭和60(1985)年3月31日

編集・発行

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

734 広島市西区観音新町4丁目8-49

T E L (082)295-5751

印 刷 所

南興株式会社